

駿河台大学教養文化研究所主催シンポジウム（共催：比較法研究所）

戦争の記憶をどう伝えるのか ——映画『タリナイ』から出発して——

2019 年 10 月 30 日（於駿河台大学 AV ホール）

大川史織 今井勇 山下尚一

開会のあいさつ

櫻坂：こんにちは。2019 年度駿河台大学教養文化研究所主催のシンポジウムをはじめます。私は本学教養文化研究所所長の櫻坂英子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日は「戦争の記憶をどう伝えるのか——映画『タリナイ』から出発して」というテーマです。この催しは、映画を皆さまに鑑賞していただいた後に、監督を含めて 3 名の先生方からコメントをいただきます。その後に質疑応答の時間を設けます。皆さまと一緒に、この映画で見て考えたこと、ご自分の記憶と対照して考えたこと、あるいは新しい時代になりまして戦争の記憶が薄れつつありますけれども、映画を見ていろいろと感じたことなどを、お互いに共有してお話ができればと思っています。そんなことを念頭においていただき、映画をご鑑賞いただければと思っています。

今回のシンポジストは、映画『タリナイ』の監督である大川史織先生、東京外国語大学で勤務している今井勇先生、本学でフランス語と現代思想を担当している山下尚一先生でございます。

そして、今回は本学教養文化研究所の主催でありますけれども、本学比較法研究所との共催で実現されました。最後に、比較法研究所所長である千草孝雄先生からコメントをいただこうと思っています。

それでは皆さん、映画を始めさせていただきたいと思います。どうぞ皆さんリラックスした形で映画をご覧になっていただければと思います。

映画『タリナイ』鑑賞

～～省略～～

アジア・太平洋戦争中、日本の委任統治下にあったマーシャル諸島では、約 2 万人の日本兵が命を落とした。その一人、佐藤富五郎さんは飢えで亡くなった。亡くなる数時間前まで書き続けた日記は戦後、戦友によって家族のもとに届けられた。日本から遠く離れた太平洋の島での最後の日々が、克明に綴られている。

2 歳で父と別れ、74 歳になった息子の勉さんは、日記を手がかりに父の最期の地を巡る旅に出る。マーシャル諸島に住んだことがある若者たちが案内役となった。

道中、目に飛び込んでくるのは、旧日本軍が遺した建物を使った家、錆びついた砲台で遊ぶ子供たち、地中に埋まった電線を掘り出して作った手工芸品、日本語の恋の歌を歌う人々…

マーシャルの暮らしのいたるところに、戦争の記憶が顔を覗かせていた。

ひとりの日本兵の魂を追いかけてつ、不意にマーシャルの人々の「記憶」に触れ、慌てる。これは、ただの慰霊の旅なのか？

美しい海と陽気なウクレレが心にざわめくドキュメンタリー。

シンポジウム

纒坂：それでは、大川史織監督、今井勇先生、山下尚一先生の順にコメントを頂きたいと思います。そして、それぞれのコメントを伺った上で、皆さまと意見を交換していきたいと思います。それでは発表していただきます。

シンポジスト 1 大川史織

大川：本日は映画上映の機会をいただきありがとうございます。ご来場いただいた皆様にも心より御礼申し上げます。

映画『タリナイ』は初めて作った映画です。高校の同級生である藤岡みなみさんと作りました。まずは簡単な自己紹介とともに映画ができた背景をお話しさせていただきます。

私は 1988 年生まれです。マーシャル諸島共和国は 1986 年に独立し、2 年後の 1988 年に日本と国交を樹立しました。ちょうど生まれた年に、外交関係を結んだことになります。

初めてマーシャル諸島という国を知ったのは、高校 2 年生の時でした。きっかけは、当時関心があった「核」「環境」「開発」「スタディーツアー」という言葉をインターネットで検索したところ、マーシャル諸島スタディーツアーの募集案内を見つけたことでした。

マーシャル諸島と聞いて、どこにあるんだろうと。ビキニ環礁で核実験が行われ、地球温暖化による海面上昇で島が沈没の危機に直面していることはなんとなく想像できても、かつて日本の委任統治領で、戦争で多くの人が命を落とした島であることを知りませんでした。歴史的に深い繋がりがあるのにもかかわらず、知らなかったことがショックだったので、まずは行ってみようとツアーに参加しました。高校 3 年生の春でした。

10 日間のツアー中、映画の冒頭とラストの場面でマーシャル人の女性たちが歌っている「コイシイワ」という歌を聴きました。日本の委任統治時代に日本語教育を受けた方や、水爆実験で被ばくした方

からお話を聞くこともできました。マーシャル諸島では「戦後」わずか 1 年後の 1946 年から 1958 年までの間に、67 回に及ぶ核実験が行われました。

日本が統治をしていた歴史を知らず、すっぽりとその時代の記憶が抜け落ちたまま、マーシャルで被ばく者の話に耳を傾けることに違和感を感じました。「日本人は戦争で変わった」「戦争がはじまる前は、マーシャル人と日本人が仲良く暮らしていた時代があった」という話も聞きました。核実験の影響や環境・開発問題など、グローバルな現代社会の課題に関心を持ってツアーに参加しましたが、現地で戦争の記憶に触れたことで、日本時代と呼ばれた約 30 年の歴史をもっと知りたいと思うようになりました。それから 4 年後、大学卒業後に 3 年間マーシャル諸島の首都マジュロで暮らしました。

住むと決めた時から、日本からマーシャルとのつながりが見えるドキュメンタリー映画を作りたいという想いを持っていました。そのためにはマーシャル語を習得し、マーシャルの人びとの生活や文化を知る必要があると思ったので、現地で就職先を見つけました。

マーシャル諸島は複雑な歴史的背景を持った国です。大国に発見され、統治され、独立した現在も政治的に利用されやすい場所にある島のことを、3 年住んだ経験だけで描こうとすることは、とてもおこがましいと知れば知るほど感じました。結局、撮影した映像を作品としてかたちにすることができないまま帰国しました。

帰国後、日本兵・佐藤富五郎さんの日記を持つ息子の佐藤勉さんに出会いました。

佐藤勉さんはこれまで 3 度、日本遺族会の慰霊ツアーでマーシャルへ行っていました。でもお父さんが眠るウォッチェ島での滞在時間はわずか 20 分ほど。それではお父さんに対して申し訳ない、気持ちが休まらないと言っていました。いつか心ゆくまでお父さんを供養したいという気持ちを伺い、マーシャル在住歴のある友人ふたりが通訳とコーディネーター役を担い、私は撮影記録係として勉さん個人の慰霊の旅に同行しました。その旅の映像をもとに編集した作品が映画『タリナイ』です。

約1年かけて藤岡みなみプロデューサーと二人三脚で編集を重ね、2018年9月にアップリンク渋谷というミニシアターで劇場公開しました。当初は2週間限定の上映でしたが、ありがたいことにアンコール上映が続き2カ月ロングラン上映されました。

その後、全国各地を回りつつ、今年の春はアメリカ、夏にはマーシャル諸島でも上映ができました。マーシャルの人に見てもらうことを念頭に撮影・編集をしていたので、夢をひとつ叶えることができたととてもうれしいです。

映画とあわせて、『マーシャル、父の戦場—ある日本兵の日記をめぐる歴史実践』（みずき書林、2018年）という本を作りました。本ができたのは、佐藤富五郎さんの日記をほんの一部しか映画で紹介できないもどかしさと、日記全文を読めていなかったうしろめたさもあり、映像編集と並行しながら日記の解説作業を始めたことがきっかけでした。

日記を大切に保管されていた息子の勉さんも、文字がとても小さく、かすれて読みにくいことから全文読むことはできていませんでした。私も手帳を拝見して、全文解説は難しいと感じましたが、時間をかけたら不可能ではないとも思いました。まずは自力で全文読み解いてみよう、と、約8カ月かけて解説に挑戦しました。くずし字、略字、異体字などが頻出するので古文書を読む知識と、軍隊用語や戦況など歴史的な背景知識を持ち合わせなければ、正確に読み解くことはできないとわかりました。

その頃、解説作業と同時に日記を届けてくれた戦友探しをしていました。その過程で、現在の勤め先であるアジア歴史資料センターを知りました。ちょうど職員を募集していて、採用されたら職員の歴史研究者の中には日記に関心を寄せてくれる人もいるかもしれないと思いました。その予感の的中し、同僚となった研究者がそれぞれの専門的な知見を持ち寄って、1年かけて日記全文を読み解く作業に協力してくれました。

映画と本は、姉妹編としてほぼ同時にリリースし

ました。

映画はあまりに戦後生まれの世代がマーシャル諸島を知らない、ということをもまずは共有したいという思いからスタートしています。富五郎さんが毎日書き続けた日記や、息子・勉さんの想いに触れながら、私たちが忘れた島で暮らすマーシャルの人に映画を通して出会う。映画をご覧になった今、言語化がすぐには難しい複雑な感情を抱かれたと思います。その気持ちを観終わった後に、ゆっくりと眺めてもらうことを大切にしたいと思って作りました。

本は映画のパンフレットとしても読めるように作りました。映画を観た後に本を読んで、また観たくなったと足を運んでくださる方も多くいらっしゃいます。

佐藤富五郎さんが2冊の手のひらサイズの手帳に書いた言葉から、飢えとはどういうものだったのか。想像してみる。日本から助けは来ないと分かっている中で、残された時間をどういう気持ちで過ごしていたのか。日記には、具体的な情景が浮かぶ描写と心の声が詰まっています。富五郎さんは不平不満を書くことよりも、コブラ（ココナッツ）を誰々さんにもらったとか、ネズミが入ったおじやを「味がいいこと日本一」と皮肉を込めて表現するなど、事実を淡々と、時にユーモアを交えて書くことで明日への活力にしているようでした。富五郎さんの人柄も感じる言葉によって、戦争とはどのようなものかを追体験すると同時に、遠くなってしまったマーシャルを近く感じられることを目指しました。

どうやって戦争の記憶につながり、また次世代に伝えることができるのか。この問いに正解はないと思います。さまざまなアクセスの仕方、つながり方があると思います。

映画の感想を例としても、継承を考える上でのヒントが隠されています。

感想の傾向を世代別に分けられるかというと、決してそうではありません。勉さんの年齢に近く、同じような境遇に置かれた方は勉さんに思いを寄せる人が多いと推測されがちですが、必ずしもそうではありません。個々人のバックグラウンドによって、

実にさまざまな感想が寄せられます。例えば、最近お父さんになった 30 代の男性は、佐藤富五郎さんの視点で映画を見た感想を伝えてくれました。自分が父親になったことで、2 歳の勉さんと別れた富五郎さんの心情がすごく分かる。子どもが中耳炎になって、中耳炎になった勉さんを気にかける富五郎さんと自身が重なり、戦争とは何かを考えたとか。幼い頃から海外で暮らした経験がある方は、マイノリティとしての立場から、マーシャル人の表情にあらわれている複雑な感情を汲み取り、もっとマーシャルの人の話を聞いてみたいと思ったそうです。観るタイミングや人生経験によって、さまざまなつながり方が考えられると思いました。

勉さんのようにご遺族の方や戦争体験者の声をどう受け継ぐかということが、日本では戦争の記憶の継承を考える上で、今もっとも議論がなされていることだと思います。

それはとても大事な議論ではありますが、さまざまな立場の人がまずいるということをいつも忘れないでいたいと思います。『タリナイ』で言えば、冒頭に出てくる「コイシイワ」という歌を歌うマーシャルの人たちがいます。旅に同行した戦争を直接体験していない世代がいます。さまざまな人が戦後 75 年といわれる時代に生きていて、それぞれが全く異なる体験を持った上で戦争の記憶につながろうとするときには、継承する声や伝え方も一面的にならないことが大切だと常々感じます。これからより一層そのことが求められてくると思います。

『タリナイ』に登場する、ウォッチェ島に着いて挨拶をした時に「祖父は日本人」と言っていたマーシャル人のアボさんという人がいます。アボという苗字もありますが、アベが変化したのかもしれませんが。アボさんについては、和歌山出身の人らしいという不確かな情報しかわかっていないので、探せるなら探してルーツを知りたいと言っていました。

日系マーシャル人だからといって、日本人を好意的に感じているかというと、そうとも言い切れません。そこには簡単に割り切ることができない、複雑な思いがあります。

戦争から遠く離れれば離れるほど、その複雑さは増していくと思います。さまざまな思いを抱える人に直接会えるなら会って、対話を重ねて、戦争の記憶をどうやって伝えることができるかというのを、今後も映画や本など継承のかたちを表現とともに考えながら発信していきたいと思っています。

最後に、よく聞かれる質問があります。映画ができる前と公開後で、勉さんの想いや考えに変化はありましたか、という質問です。

映画では、勉さんのお父さんへの思いは十二分に感じられるかと思います。撮影をしている旅の最中は、島でお父さんを感じることに、無事に慰霊祭を行うことがいちばんの目的でした。映画を公開して、観客の人たちから感想を直接聞いたり、今後の夢を聞かれたりする中で、マーシャルの人たちともっとコミュニケーションをとるということが勉さんの目標になりました。実際に今年の夏、マーシャルの人たちと過ごす時間をすごく大事にされていたのが印象的でした。

人の考え方や価値感、歳を重ねれば重ねるほど変えることは難しいと私は思いがちだったんですけども、勉さんを見ると、こんなにも柔らかく、自分の考えを学びの中で変化させることができることはとても素敵なことだと思います。

長くなってしまいました。後ほど、フロアからのご意見もお伺いできればうれしく思います。ありがとうございます。

シンポジスト 2 今井 勇

今井：皆さん、こんにちは。東京外国語大学などで非常勤講師をしております、今井と申します、よろしくお願ひします。座ってお話をさせていただきます。

私自身は日本近現代史を専門として研究を続けておりまして、特に戦後の日本において、平和や反戦というものがどのように語られてきたか、どのように変化をして考えられてきたかということを、戦没者の遺族運動、まさに今日の佐藤勉さんが戦没者遺族という立場になられるかと思いますが、遺族運動

の中でどのように変化をしてきたかということを中心に研究してまいりました。

本日は戦争をいかに記憶するかということで、大川監督の映画を参考にしながら皆さんで議論をするということもありますので、マーシャルと日本、そして戦争とマーシャル、それぞれがどのような関係をもちながら、どのような歴史をたどってきたのかということ、簡単にではありますがお話をさせていただきますと思います。

1) マーシャルと日本の歴史

もうご承知の方はたくさんいらっしゃるかと思いますが、簡単にマーシャルと日本の関係をご紹介します。

日本とマーシャルというのは、地理的には遠く隔たれているように思えますが、じつは歴史的に非常に関係が深い。マーシャルと日本は、日本の近現代史という期間に限ってみても、何度も接点が出てくるような関係があります。

日本近代史において、初めてマーシャルとの関係が登場してくるのが第一次世界大戦（1914 年～1918 年）期になります。第一次世界大戦において、当時ドイツ領であったマーシャル諸島を、連合国側で参戦をした日本が占領をするというところから接点が始まるということになります。

その占領をしたマーシャル諸島を、第一次世界大戦後に発足した国際連盟から委任される形で、日本が統治をおこなうことになります。マーシャル諸島を含め、いわゆる南洋群島と呼ばれる、トラック諸島やパラオ諸島、そしてマリアナ諸島といった旧ドイツ領の統治を担当する南洋庁という施政機関が設置され、その統治下において現地住民に対する日本語教育なども進められていきました。

その統治は、第二次世界大戦においてマーシャル諸島が戦場となり、そして米軍に占領されるその時期まで続くことになります。

その影響というかその名残というのが、まさに今日の映画の中に出てきたさまざまな場面、さまざまな会話の中に残る、日本語由来と思われる言葉の

数々です。ドキッとさせられるような言葉もあったかと思いますが、それらは日本人の多くが忘れてしまっているマーシャルに残された日本の記憶ということで間違いないと思います。

そのような形で日本に統治されていたマーシャル諸島が太平洋戦争下において激戦地となり、1944 年 2 月にはマーシャル諸島に属するケゼリン環礁の日本軍守備隊が玉砕することになります。マーシャル諸島をめぐる戦いについてはこの後もう少し詳しくお話をさせていただきますが、マーシャル諸島を占領した米軍はマリアナ諸島・パラオ方面、そしてフィリピン方面へと進攻していくことになります。

そして第二次世界大戦後になりますが、同地を占領したアメリカが、新たに設立された国際連合から信託統治領とすることを承認され、統治を始めることになります。つまり、約 30 年続いた日本の統治体制から、新たなアメリカの統治体制へと変化したということになります。

そのアメリカの統治体制下、これも日本人にとっては非常に大きな歴史的記憶ということになるかと思いますが、マーシャル諸島のビキニ環礁などにおいてアメリカによる核実験が繰り返されました。この核実験は 1946 年から 1958 年に至るまで断続的に続けられ、ビキニ環礁だけでも 20 回以上の核実験が行われました。ビキニ環礁の他にもエニウェトク環礁での実験なども含め、マーシャル諸島全体ではおよそ 70 回にもおよぶ核実験が繰り返され、各環礁からの住民の強制移住や実験後の残留放射能による健康被害など、甚大な影響を及ぼすことになりました。

その中で 1954 年、キャッスル作戦と名付けられた水素爆弾を使用した実験が行われ、その際に近隣を航行していた日本のマグロ漁船第五福竜丸が被爆をするという事件が起きました。被爆した第五福竜丸の乗組員 1 名が半年後に死亡し、広島・長崎に次ぐ核の恐怖が日本全国に大きな衝撃を与えました。これを契機に反核運動が全国的な国民運動として展開されるようになり、1955 年には広島で第一回原水爆禁止世界大会が開催されました。

その意味でも戦後の日本の歴史、さらには戦後の日本の反戦平和運動の歴史という側面からも、実はこのマーシャルという地域は非常にゆかりのある、縁の深い地域であるということができるといえます。

その後 1979 年に至ってマーシャルにおいて憲法が制定され、自治政府が発足し、1986 年マーシャル諸島共和国として独立を果たしました。

先ほど大川監督のほうからご紹介がありましたが、1988 年には日本との外交関係が正式に樹立され、昨年国交樹立 30 周年を迎えたということになります。

そのような形でマーシャル諸島というのは非常に日本にとって縁が深い、関係の深い地域であるということがいえるかと思いますが、一方で日本とマーシャルの関係を十分に記憶している日本人は非常に少ないというのが現実ではないでしょうか。

2) マーシャルと戦争の記憶

しかし、映画で見ていただいたとおり、いろいろな日常生活の場面・場所において、マーシャルの人々の生活の中には日本の記憶が存在しており、そして戦跡という意味でも、映画で映し出された全てが日本軍のものというわけではないのかもしれませんが、さまざまな場所において戦争の記憶、戦争の遺物というものが、マーシャルには存在をしている。そのような状況を考えますと、ある意味で非常にアンバランスな関係が日本とマーシャルの現状として存在しているといえるのではないのでしょうか。

さらにマーシャル諸島における日本軍、なかでも今回映画に登場した佐藤勉さんのお父さんでいらっしゃる佐藤富五郎さんが戦ったとされるマーシャル諸島のウォッチェ環礁について、その存在を知っている現代の日本人はほとんどいないといえるでしょう。

今回お配りしたアジア太平洋戦争の関係地図をご覧下さい。この地図は、いわゆる太平洋戦において戦場となった地域を網羅した地図になっているのですが、皆さんも十分ご承知のとおり、1941 年 12

月に始まった太平洋戦争は緒戦こそ日本軍が優勢でしたが、1942 年、43 年になっていくとアメリカを中心とした連合軍による反攻作戦が太平洋各地で開始されます。

その際に日本の勢力圏の最先端に位置付けていたのが、北はアリューシャン列島のアッツ島やキスカ島であり、東ではニューギニアやガダルカナル島、そして今回のマーシャル諸島などであったということになります。

つまり、太平洋戦争を通じてこのマーシャル諸島というのは、太平洋における日本の勢力圏の最前線であると同時に、連合軍によって開始された反攻作戦の早い段階での標的となった、そういった地域であったということはこの地図を見てもご理解いただけるのではないかと思います。

具体的には 1943 年 8 月に佐藤富五郎さんはマーシャル諸島のウォッチェに到着しています。その 3ヶ月前、1943年5月にアッツ島の日本軍守備隊が玉砕するなど、連合国の反攻作戦が本格化し、日々戦局が深刻化してくるという状況に至っていました。

そのような中で、1943 年 11 月にマーシャル諸島の東に位置するギルバート諸島に連合軍が侵攻してきます。そのギルバート諸島に属するマキン・タラワ島の日本軍守備隊が激しい戦闘の末に玉砕します。ギルバート諸島攻略に引き続き、1944 年 1 月～2 月にかけて、今回の舞台となるマーシャル諸島が次の攻略目標とされました。

実際マーシャル諸島のエニウェトク環礁やクエゼリン環礁など、映画の中でも何度か地名も出てきたかと思いますが、そういった地域においてはアメリカ軍が上陸し、激しい戦闘の末に守備隊が玉砕することになりました。

ただその一方で、この富五郎さんが駐屯していたウォッチェ環礁に関しては、そこを武力で占領する、いわゆる上陸作戦が行われなかったのです。当初は、このウォッチェ環礁などを占領しそこを橋頭堡としながらクエゼリン環礁へと侵攻する計画も存在したようですが、マキン・タラワの攻防戦において想定以上の被害を出したアメリカ軍は、主要な環礁のみを占領することにし、残された環礁については上陸

作戦をおこなわず、周囲を包囲して孤立させる作戦を採用したのです。結果的に、ウォッチェ環礁などは補給を断たれ、孤立させられた状態のまま、アメリカ軍はサイパンなどマリアナ諸島の占領を経て、パラオ諸島からフィリピンへと侵攻していくことになります。

つまり 1944 年の 1 月～2 月以降は、アメリカ軍からの攻撃というものがほとんど無い状態、ほとんど無い状態というのは、環礁周囲を包囲したままの状態、航空機による爆撃や機銃掃射、艦艇からの艦砲射撃などが散発的におこなわれるといった状態になったようです。佐藤富五郎さんの駐留したウォッチェ環礁もまた、そのような状態の中で自給自足を強いられるという状況に陥っていたのです。

3) 佐藤富五郎日記にみる戦争の記憶

ただ何よりも重要なことは、残された兵士たちにとってあまりにも苛酷な状況で孤立したウォッチェ環礁でありながら、大局的な戦局の面から申し上げるならば、もはやその存在は無意味なものとなってしまったということです。つまり、マーシャル諸島の主要部はアメリカ軍の支配下となり、「転進」という美名のもとでの撤退はおろか、補給さえもほぼ不可能な状況下で、孤立した状態で放置されたということになります。

映画の中にも出てきたように、最終的には 1945 年 4 月 25 日、敗戦まであと数ヶ月という段階で、「最後かな」という日記の言葉を残して病身の富五郎さんは息絶えたわけですが、その死に至る経緯をかえりみるならば、主要な戦局からは全く隔絶した地で続いた、生きるための戦争こそが、この佐藤富五郎さんにとっての戦争そのものであったといえると思います。

どうしても現代社会において戦争が扱われる場合、ある戦争全体であったり、勝敗を左右するような激戦であったり、華々しい戦い、有名な戦いというようなものが想定されがち、思い出されがちです。しかし、実際一人一人の兵士の目線に立ってみれば、もちろんそういった激戦の中で死んでいく兵士も数

多く存在した一方で、今回の佐藤富五郎さんのような、太平洋の孤島で包囲され、いつ終わるとも知れない飢えと戦いながら、不意におこなわれる砲撃や爆撃によって命を落とすかもしれない恐怖との戦いの中で、無残に命を落としていった兵士も無数にいたことを忘れてはならないと思います。

そのような決して華々しいものではない、無残で理不尽な死と隣合わせの日々こそが、一人一人の兵士たちにとっての戦争であったということが、映画を通して、そして富五郎日記を通して理解できるように思います。

その一方で、太平洋の小さな環礁で孤立を強いられ、全く戦局と隔絶した状況であったかというところではなかったのです。本日お配りした資料のうち、先ほどご紹介した富五郎日記の抜粋、11 月 3 日の記述にご注目下さい。これは 1944 年 11 月 3 日に記述されたものですが、いわゆる神風特別攻撃隊について訓示を受けたという記述があります。神風特別攻撃隊は、富五郎さんの部隊において訓示がおこなわれた直前の 1944 年 10 月 25 日に初めて航空母艦の撃沈という大きな戦果を挙げ、そして 10 月 29 日の新聞で大々的にその戦果が発表されました。ただ、神風特別攻撃隊が組織されたのはマーシャル諸島から遠く離れたフィリピンの戦場においてであり、その戦果もまたフィリピン近海におけるものでした。

つまり、ウォッチェ環礁にいた富五郎さんは孤立した状態に置かれながらも、11 月 3 日には神風特別攻撃隊の情報を上官を通じて知っていたということになります。ただ、そのもたらされた情報というのは極めて日本軍にとって都合のいいものばかりであり、実際には大敗だったにも関わらず大勝利として伝えられた台湾沖航空戦のような致命的な誤報（この台湾沖航空戦の幻の戦果の数々についても富五郎さんは日記に記しています）も存在していましたが、少なくともマーシャル諸島外からの情報、戦闘の状況や変化など、そういったものは通信を通じて知ることができる状況にあったといえます。

つまり孤立した戦場にあったとはいえ、限られた情報ではありながらも知ることのできる状況にあっ

たということも、残された日記から読み取ることができるのです。ただ、これもまた日記に記されたが故に知ることのできる内容なのですが、伝えられた情報は極めて楽観的な内容も多かったようで、いつかはこのマーシャルにも日本軍が反撃して救援にやってくるだろう、それまで何とか堪え忍びたいというような内容の記述がみられます。その後の戦局の展開を知る後世を生きる我々からみれば、本当に痛々しいくらいの小さな希望を頼りに一日一日を生き延びようとしていたことが、日記を通じて知ることができるのです。

そういう意味でも映画を見ながら、そして残された日記を読みながら、いろいろとその当時の戦場における一人一人の兵士、そういった存在を想像し感じ取ることができる。そして、その兵士が残した家族、子どもたち、その方たち一人一人が戦後の日本においていかに生き、そして戦争の記憶と向き合い、肉親を思ったのかということも、この映画を通じて考えることができるのかなと思います。

最後になりますが、今申し上げた戦争を記憶するというポイントについてですが、富五郎さんのような一人一人の兵士の記憶というのは、まさに生きるために戦い、死んでいった戦場の記憶と直結しているように思います。そのような戦場の記憶に対して、国家による公式の戦史や歴史教科書などで示される戦争の歴史はまさに戦争全体の記憶として存在し、大きな枠組みとしての戦争の記憶を形成しています。そのような関係性において、かつて両者は相互補完的な関係にあったと考えられるのですが、戦争体験者の減少にともなって先に挙げた戦場の記憶というものが次第に語られなくなり、注目されにくくなってきています。そのような具体的な戦場の記憶が失われつつある一方で、後者の戦争の記憶の中でも、例えば国家への献身ばかりが強調される戦争の記憶や、一人一人の兵士の顔が見えず数値化・統計化された戦争の記憶など、抽象化された戦争の記憶ばかりが幅をきかせるようになり、そういった状況が現代の日本においてどんどん広がりつつあるように思います。

そのような状況の中で今私たちに求められること

は、まさに一人一人の兵士がどのように戦場で生き死んでいったのか、一人一人にとって戦場とは、戦争とはいかなるものであったのかを具体的に想起しながら、つまりは生々しい戦場の記憶に基づきながら、大きな戦争の記憶と接続していくことなのではないでしょうか。それは決して簡単なことではありませんが、今日の映画、そして富五郎日記の存在は、そのための大きな一助となるものであろうと確信しております。

本日はご清聴ありがとうございました。

シンポジスト3 山下尚一

山下：大川監督、今井先生、ご発表いただき、ありがとうございました。

みなさま、私は、駿河台大学グローバル教育センターの山下尚一と申します。映画を受けて、コメントをさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

お二人のお話にもありましたように、大川さんは、映画『タリナイ』の監督であると同時にプロデューサーでもあり、この映画の姉妹本である『マーシャル、父の戦場』の編者でもある。大川さんと今井さんは、お二人ともアジア歴史資料センターで調査員をなさっていて、何人かのメンバーと、『マーシャル、父の戦場』のために、日記を復刻する作業をしていた。私はといいますと、今井さんとひょんなことから知り合いになって、研究会をいっしょにやったりするようになった。それで、映画『タリナイ』を鑑賞してシンポジウムをやってみようという企画が持ち上がったということです。

みなさま、映画をご覧になって、それぞれ気になる点、興味深い点があったのではないかなと思います。私の専門はフランス哲学、とくに 20 世紀のフランス哲学です。ですので、私としては哲学の立場からコメントをしたいなと思っています。ちょっとややこしい話になるかもしれませんが、どうぞご容赦ください。発表にあたり、配布資料を用意してきました。A4 サイズ 1 枚のものです。みなさん、お手元にございますでしょうか？それでは、はじめま

す。

私の発表のタイトルですが、「戦争はいつはじまりいつ終わるのか——リズムとしての戦争」です。発表は、三つの部分に分かれています。

1) 戦争は本当に終わったのか

私がこの映画を見たのは、2018 年の夏に渋谷の劇場で 1 回と、今日のシンポジウムにあたって 2、3 回ですけれども、私がとくに関心をもったのは、「戦争は本当に終わったのか」ということです。私たち、現在の日本人からすると、戦争は終わったものだと思われている。だけど、本当に終わったのだろうか、そういう問題がこの映画には隠されているんじゃないかと個人的に思いました。

たとえば、映画がはじまってほしい 60 分くらいのところなのですが、マーシャル在住の日本人男性である末松さんという方が、ある夜に、マーシャル人女性に話を聞くという場面があります。マーシャル語で聞いている。その場面は暗いので、その女性の表情はどうもよくわからないのですが、その女性は、島にある砲台の跡を見ると、今でもドキッとする、怖くなるというふうになっています。プリントの引用 1 を見てください。ちょっと読んでみます。

引用 1. 大川史織監督『タリナイ』2018 年より。

「〔末松：〕 月日経って、戦争は終わりました。〔マーシャル人女性：〕 終わったの？ またやらないの？ 〔末松：〕 もうやらない。〔女性の笑い声〕 〔末松：〕 僕も二度とやらないでほしい。〔女性：〕 よかった。飛行機の音が聞こえるだけで怖い。聞こえる度にドキッとする」

引用終わります。

「戦争は終わった」と聞いて、たとえ冗談であっても、「本当に終わったのかい、またやるんじゃないのかい」というふうに聞き返す、そういう人がいるんだということです。私たち日本人は、おそらくこういう冗談はいわない、いえないんじゃないかなと思います。だけど、このマーシャルの女性にとっては、「うん、戦争は終わった」というふうに、素

直には言えない部分がどうしても残ってしまっているということなのかなと感じました。

ここから、映画のひとつの論点が浮かんでくると思います。それはつまり、戦争は本当に終わったのかということです。別の言葉でいうと、現在の日本と過去の日本、そして現在のマーシャルと過去のマーシャル、この四つのものをどんなふうに結びつけるのか、どんなふうに編み上げていくのかということだと思います。私たち、現代の日本人は、それほど疑問を持つことなく、「戦争は終わった」というふうに考えているけれど、本当にそうなのかなと。ほかの人たちにとってはちがうんじゃないのか。もっというと、そもそも戦争なんてものは、いつからいつまでおこなわれたとか、そんなふうに客観的にいえるのか、そんなふうにはいえないんじゃないか、そういう問題があるということです。

先ほど今井先生がおっしゃったように、ひとりひとりの体験としての戦争というものと、ナショナルな次元で語られる戦争というものがある。そこにやっぱりすれちがいがある。ナショナルな次元で見ると「戦争は終わった」といえるかもしれないけれど、ひとりひとりの次元でいうなら、実は戦争はつづいているんじゃないか、終わっていないんじゃないか、そういう問題だと思います。

2) 戦争から距離をとることのむずかしさ

そう考えると、戦争というものを客観的に考える、戦争から距離をとって考えるというのはどうもむずかしいようだ、ということになってきます。あるいは、戦争から距離をとって考えることは、ある側面を見落としていることになるかもしれない、ということになります。プリントの引用 2 を見てください。これは、哲学や思想の立場から、戦争という出来事について考えている本からの引用です。

引用 2、西谷修『夜の鼓動にふれる』(1995)、ちくま学芸文庫、2015 年、47-48 頁。

「〔戦争〕は人間の知性がよく制御できるものではないようです。〔中略〕そして戦争はいつも、人間の平和への努力にもかかわらず繰り返されてきたので

す。〔中略〕だから戦争をまともに考えようとするなら、自分が戦争から超越していると、つまり自分が〈戦争〉を免れていると思わないほうがよいのです。戦争はもちろん人間が火付け役になりますが、そしてひとは平和の秩序のなかでは戦争をひとつの考察の対象にすることもできるし、戦争を企てることもできますが、いざ戦争が起これと、ひとはいつも「こんなはずではなかったのに」と思いながら、すでに〈戦争〉のさなかにいてしまうのです。」

戦争というものは知性で制御することもできないし、平和を望んでいるにもかかわらず戦争は起こってしまう。そうであるならば、私たちは戦争とは離れた時代にいるんだとか、戦争と関係のない国にいるんだとか、そんなふうには考えないほうがいい。私たちはいつの間にか戦争に巻き込まれている、気がつく戦争がはじまっているということです。そしてまた、先ほどのマーシャル人女性がほのめかしているように、この前の戦争だって本当は終わっていないかもしれないということです。そう考えると、私たちはどうやら、戦争というものからうまく距離をとることができない、そういうことになってきます。

3) 戦争は私たちがつくり出すリズムである

私たちは戦争からうまく距離をとれない、じゃあそれはどういうことなのか。ここでは戦争の二つの特徴を取り上げたいと思います。

a) ひとつ目の特徴は、戦争というのは、国家が自分勝手に進めていくものではないし、私たちを無視してはじめるというものでもない。むしろ、私たちひとりひとりが、国家とともにつくり出してしまうものだということができます。つまり、私たち自身が、自分の国をほかの国から守らなくちゃといったようなことを、たとえば新聞などのメディアから取り入れたり、日常のなかで話したりして、少しずつ少しずつ戦争の雰囲気準備していく、つくり上げていく。だから戦争というのは、私たちがつくり出し、私たちがそこに参加しているような、そういったひとつの大きな流れ、大きな波のようなものの

かな、というふうに思います。

b) 二つ目の特徴ですが、戦争というのは、だれかのところを避けてとおるということがない。つまり、私たち全員をつかみ取り、全員を巻き込んでしまうものだということができます。「いや、自分だけは戦いに参加したくない」というふうに思っても、近所の人たちから「そうした考えはおかしいんじゃないか」といわれたりする。当然のように国を守る兵士として動員させられて、それが名誉なことだとみなされたりする。そういうことから考えると、戦争というのは、私たちみんながつくり上げるんだけど、それとともに、私たちみんながそこに巻き込まれていく。能動的につくっていきながら、そこになぜか受動的に巻き込まれていく。そういうひとつの大きな流れ、大きな波のようなものだということができます。

この a) と b) の二つの特徴をまとめると、戦争というのは、ひとつの大きなリズム、巨大なリズムだということができるかなと思います。すなわち、私たち自身がつくり出すと同時に、私たち全員をわしづかみにして離さないような、そういう大きなリズムだということです。私たちひとりひとは、このリズムといわば一体化している。だからこそ、先ほど言ったように、戦争からうまく距離をとることができないんだと思います。

プリントの最後に、私の発表のまとめを書いておきました。1) 戦争は、いつはじまっていつ終わるということができない。2) 戦争からうまく距離をとることはむずかしい。3) 戦争とは、私たちがつくり出すとともに私たちを巻き込む巨大なリズムである。

こうしたところから戦争について考えるのが重要なのかなと、私は思っています。もちろん、これとはちがう考えもあるかなと思います。

大川さんや今井さんと比べると、抽象的な話になってしまって大変恐縮です。ひとまず、これで私の発表を終わりにします。ありがとうございました。

質疑応答

山下：さて、三人のシンポジストの意見を聞いていただきました。ここからは、映画についての意見、あるいは感想でもいいと思いますし、シンポジストのお話に対する質問ということでもよろしいかなと思います。会場の皆さんの中で、ご意見やご質問があるという方がいらっしゃいましたら、挙手をしていただければ幸いです。

A：ありがとうございました。今井先生と山下先生に1つずつ質問というか、お伺いしたいと思います。戦争というテーマなんですけれども、戦争は多分、大きく分けると宗教的なものとか、これは民族的な紛争かもしれませんが、あとは領土拡大にかんするもの、そして経済的なねらいのあるもの、こんな3つくらいに分かれるのかなと思っています。

まず今井先生への質問です。先ほどの年表には、1914年に日本がマーシャル諸島を占領とあります。その後にアメリカがマーシャル諸島に非常に興味を持って、取り返すというわけじゃないんですけれども、戦いを挑んだということですね。マーシャル諸島はそういった戦争に巻き込まれてしまった。そこで伺いたいのですが、日本から見て、もしくはアメリカから見て、マーシャル諸島はどんな価値、もしくは魅力があったのか。これが今井先生への質問です。

それから、続けて、忘れてしまわないうちに。山下先生への質問です。見出しの「3）戦争は私たちがつくり出すリズムである」というところ関連するものです。戦争は消極的な戦争というのと、それから積極的な戦争、つまり積極的というのが先ほどの領土を拡大したいとか、そこから得る経済的なものを手に入れたいというようなものと、それからもう1つは消極的というのは防衛するという意味で、嫌々だけれども戦争になっちゃいましたというものです。

この説明の中で、自分の国を他の国から守るべきだ、これはつまり防衛だと思うんですけれども、そ

こから少しずつ戦争の雰囲気がつくり上げられていくというのが、うまくつながらないのではないかと感じました。ひとりひとりのレベルにすると、例えば山下先生も外出されるときだとか、夜寝るときというのは家の鍵を掛けられると思うんですね。それはなぜかという泥棒が入るかもしれないからです。でもだからといって、そこから少しずつ、もっと守らなくちゃという雰囲気にいかどうかというところは、少し違うのかなというふうに感じるころがあったんですけれども。あるいは、これとは違った理解をしたほうがいいのでしょうか。うまくまとまりませんでしたが、これが山下先生への質問です。よろしくお願いします。

今井：ご質問ありがとうございます。いわゆるマーシャルの存在意義というか、戦争に関わる地理的、地政学的な価値という意味でお答えを申し上げると、いわゆる日本が占領した段階、日本がドイツから、ドイツの支配地域であったものを日本が占領した段階においては、資源面における価値というものは非常に乏しかったと考えられます。

実際に日本による統治が始まった段階でも目立った主要産業があったわけではなく、産業育成については南洋庁でも頭を悩ませたという記録も残っています。結果的には製糖やコブラの生産が主要な産業となり、日本からの需要に応じたということです。

ただ地政学的に考えますと、やはり東南アジアという資源地域への中継拠点という意味で非常に価値があったと考えられます。軍部としてはそこを軍事基地化することによって南方への進出拠点としたかったようですが、アメリカがそれを強く警戒し、委任統治規定では軍事基地の建設を禁止しました。

一方でアメリカに関しても、マーシャル諸島は中部太平洋における戦略拠点という意味で価値を見出していたようです。そのため、日本の委任統治下においても軍事基地化を警戒し、太平洋戦争時には反攻作戦の初期段階においてマーシャル諸島を占領したわけです。そして第二次世界大戦後においては、いわゆる太平洋上の隔絶された地理的条件に価値を見出し、新型核爆弾の実験場という意味で利用する

ことになったわけです。

A: ありがとうございます。

山下: ご質問ありがとうございました。とても重要な質問ではないかと思います。おっしゃっているのは、他の国から自分の国を守ることが、そのまま戦争の雰囲気をつくり上げてしまうと言えるのかどうかという問題だったのかなと思います。

今井先生のご発表にあったように、戦争にはいわば二種類あって、国家のように大きな枠組みで語られる戦争というのと、ひとりひとりの視点で語られる戦争というのがある。私が焦点を当てたのは、後者の視点です。つまり、私たちひとりひとりのなかで戦争というものがどういうふうにはじまっていくかということに焦点を当てたわけです。ご質問のなかにあった、積極的な戦争とか消極的な戦争というのは、いわば国家のレベル、ナショナルなレベルでのお話かなと思います。私としては、そうではなくて、私たちが日常を暮らしているなかで、戦争をはじめたいだなんて考えていないにもかかわらず、どうしてはじまってしまうのか。戦争を正当化するようなイデオロギーというか考え方というか、そういうものがいつの間に私たちのなかでつくられてしまうのか。もしかしたら、私たちひとりひとりのささいな行動のなかに、戦争へと方向づけるような何ものかがあって、普段の生活をしているのに、知らぬうちに、無意識のうちに戦争を支えてしまっているかもしれない、そういうところがあるんじゃないか。こういうミクロな視点で考えてみたいなと思ってお話しさせていただいたんです。

ですが、守るという意識が、攻撃するということにそんなに安易につながるのかというと、たしかに私自身も疑問をもっています。なので、おっしゃるとおりだと思います。もう少し精緻に考え直すべきだなと考えています。ご指摘ありがとうございます。あまり答えになっていないかもしれませんが、よろしいでしょうか。

A: ありがとうございました。

山下: 会場みなさま、他にはどなたかいらっしゃいますか。もしよろしければ、お名前を頂けると嬉しいです。

越智: 越智直樹と申します。映画を鑑賞させていただき、ありがとうございました、そしてご講演もいただきありがとうございました。実は私は、おととしの夏までミクロネシア連邦にあるチューク州という所に住んでいました。そこのザビエル高校というところで、哲学と神学の教員をしていました。

その学校は、戦前に、ドイツ領から日本領に移った後に作られた日本の基地があったんですが、その基地の建物を校舎にしています。4年制の高校で、今でもやっています。このチュークにも、やっぱり戦争の記憶というか爪痕みたいなものはあって、この地図でいうとトラックというところになりますけれども、戦争の記憶がたくさん残っているのを目の当たりにしましたし、私の生徒たちにはハシゲチ君とかモリ君とか、そういった日本名を持つ子どもたちがたくさんいました。たとえば海にダイビングして沈んでいる船を見たりとか、山の中のジャングルに入っていくと戦争の遺跡を見たりということもありました。

私は常に思っている二つのことがあって、そのひとつは、日本ではこの太平洋の記憶が全然ないということです。もうひとつは、私自身が戦争をはじめたわけじゃないし、戦争を経験しているわけじゃない、そういう立場なんです。ではどうやって戦争の記憶というのを継承していくことができるんだろうかというのが私の問いです。

現地では、沈んでいる船も、ジャングルの中の大砲も今どんどん朽ちてきています。そういったものがなくなったら、この美しい島々で行なわれた戦争の記憶は消えていってしまうんでしょうか。どうやってそれを継承していくことができるのか。そういうことをずっと考えたいと思っていたときに、ちょうど今回、『タリナイ』が上映されるという機会を知って、きょう来たわけです。なので、もしそのためのヒントみたいなものを頂けたらありがたいと思います。

大川：ありがとうございます。今日はご来場いただき本当にありがとうございます。

戦時中はトラック諸島と呼ばれていた島ですね。チュークはマーシャルと同じミクロネシア地域にある島々ですが、同じミクロネシアでも言葉は全然違いますよね。 Guamからマーシャルへ行くまでの間に、チュークに 20 分ほど休憩で降り立ちますが、同じミクロネシアといえども、まったく異なる世界が広がっているといつも感じます。

戦争の記憶の継承を考えると、言葉について考えます。何世代も前まで遡って自分のルーツを知るとか、目の前にいる人のバックグラウンドに想像力を働かせてつながりを持とうとすると、言葉を用いて複雑なコミュニケーションを図ることができる一方、記憶を美化したり分断を生むのも言葉です。

母国語でない言葉で、戦争の記憶をどこまで継承することができるのだろうかという疑問もあります。とくにマーシャル人の戦争体験を聞くことはできても、その言葉の真意を汲み取ることはとても難しいと感じます。哀しい歌詞の「コイシイワ」を実に楽しげに歌うし、「戦争は終わったの？またやらないの？」とマーシャル人のおばあちゃんが訊ねる場面でも、おばあちゃんは言葉を発した後、冗談ばい乾いた笑いをしています。その笑いには、その言葉を向けられた相手を傷つけないようにという気遣いも感じられますし、もう何周も回った深い悲しみと怒りと絶望があって、あの笑いに辿り着いたのではないかと推測します。

マーシャルで上映した時に、日本での上映とは異なる場面で笑いが起きました。「いまだに日本人もアメリカ人も、修復しに来ない」とマーシャル人が不満を吐露するシーンで、笑いの渦が起きました。日本で笑いが起こることはあり得ない場面です。

マーシャルの人は、どんなに苦しく耐え難い記憶でも、淡々と語るし、よく笑います。その笑いの意味をどう受け止めて、戦争の記憶を継承する時に考えていったらいいのかなということを、映画『タリナイ』マーシャル上映であらためて考えさせられました。

今日この場でお話をさせていただき、意見を交換

できる場があるように、さまざまな立場や考えの人と対話を重ねて、一緒に考え続けることが大切だと思います。また、言語や立場の違いを超えた戦争の記憶の継承についても、考え続けていきたいと思っています。ありがとうございます。

越智：ありがとうございます。私自身も戦争の問題をずっと考えてきて、反戦、平和の問題というのをどういうふうに主体的に考えて、そして継承しているのかということを、私自身の大きな課題としてずっと続けています。ひとつ言えることというか、私自身が今考えていることは、これまではやはり戦争を体験した人がいて、その人の話を直接聞いたりできる、受動的な立場で受け取ることができる、そういう時代がこれまでだったと思うんですね。

しかしおそらく、これからあと 10 年、20 年とたつてくると、そういった経験をまったくしたことがない、いわゆる日本人というなかでは経験したことがない、そんな時代になってきたときに、「じゃあ受動的にはできないんだったら、もう積極的に主体的にやるしかないじゃないか」となるわけです。能動的に世論を作るというか、戦争をしないということはどう考えていけるのか。今生きている人間が、戦争をしないとか、平和を守るということはどうやって実現していくのか。より具体的に、平和を作る、戦争をしない、それをどうやってつなげていくか、広げていくかということを、個人個人で考えて、そして教育の中で共有していくということをひとりひとりやっていかなきゃいけないのかなと思います。「じゃあ実際にはどうやってそれをやるんだ」と言われると、やはり私自身も考えなきゃいけない。そういうふうに考えています。

大山：駿河台大学経済経営学部教員の大山です。個人的に、戦争とか平和とかを含めて、歴史を語るにはどうしたらいいかという面に興味があります。それできょうのご発表で、少し気になるところがあります。今井先生の資料に「玉砕」という表現があるんですね。これはおそらく、日本の戦況を直接表現するのを避けるために、大本営発表の中で使われ

た言葉だと思うんです。多分これは、日本の国体を守るために潔く死ぬというような所見ですね。この玉砕という表現を、こういうシンポジウムの場合では大丈夫なのかなと思うんですけれども。いかがでしょうか？

今井：はい、ありがとうございます。おっしゃるとおりだと思います。私自身も玉砕というのは、まさに玉のように砕け散ると、戦死というものをいかに華々しく美しいものであるかということを示すために使われる言葉ですので、本日の私の主旨からしても、大きな戦争の記憶に属する玉砕という言葉を使用するのは適切ではないのかなとも思います。

ただ、現在においては学術用語・歴史用語としても玉砕は一般的に使用されることも多く、上記のような政治的・思想的な含意のないフラットな言葉になっているとも言えるかと思います。

山下：はい、ありがとうございます。いろいろとご質問ご意見等あるかと思いますが、時間になりましたので、これで質疑応答の時間を終わりにしたいと思います。

ここで、大川監督と今井先生のご著書を紹介させていただきます。

きょうは映画を見ていただきましたが、その姉妹編として、大川監督には著書があります。『マーシャル、父の戦場』という本です。これには、佐藤勉さんの父である富五郎さんの日記が完全に収録されており、日記をめぐる研究者たちの発言や論考があります。また、映画『タリナイ』について、さまざまな立場の方の寄稿もあります。

今井先生にも著書があります。『戦後日本の反戦・平和と「戦没者」』という本です。これは、今井先生の博士論文がもとになった専門書です。これまでの日本において反戦とか平和という論理がどのような歴史的経緯をたどってきたのか、「戦没者」というイメージはどういうふうにとらえられてきたのか、そういうことをつまびらかにした本です。

大川先生の本と今井先生の本はスタンスがかなり異なっていますが、その分ちがった側面を映し出し

てくれてたいへん勉強になります。みなさま、今日のシンポジウムをとおしてさらに関心をお持ちになったのであれば、参考にいただければと思います。

会場のみなさん、今日ご登壇いただいた大川監督と今井先生に拍手をお願いいたします。

閉会のあいさつ

山下：最後に、本学の比較法研究所の所長である千草孝雄先生からごあいさついただければと思います。

千草：まとめる役を仰せつかっているんですけれども、こういう内容なので、なかなかまとめるのは難しいですね。

今の日本社会というのは、非常に多くの問題に直面している。何を問題と考えるかは皆さんによってさまざまかと思いますが、例えば超高齢化、超高齢社会の問題ですね。あるいは、今月に入っているいろいろな災害等があって、これからもそういった防災に多くの金を使っていかなければならないということも明らかになったと思います。そうした多くの問題があるわけですが、それに対してこれから日本が取り組んでいくのに当たって、大前提になっているのはやっぱり平和だろうと思うんですね。平和というものなくして、そういった問題を解決することは難しいと思います。

きょうは、まさにそういった戦争あるいは平和について、非常に多くの問題を提起して下さったと思います。それについて細かく検討することはできませんでしたが、そういった問題を考えるチャンスを持ったということは、きょうはとても良かったと思います。

以上をもちまして、このシンポジウムを閉じたいと思います。どうもありがとうございました。